

鷹の目の狩人

XXIV

最終回

限りなく、道を求めて

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

愛用する暖簾に相田みつをの言葉が響く。「道はじぶんでつくる 道は自分でひらく 人のつくったものはじぶんの道にはならない」。企業人の時は開発担当として、事業家としては、新しい世界を、ひたすらオンリーワンを求めた。業界の課題を抽出し、あらゆる可能性を求めて、解決策を考えた。子供たちとディズニーランドで遊んだ時でも、つい、人形の水面下の駆動原理に目が行った。当時、工場の無人化、物流の開発を担当していた。環境対策、省人化、物流とくれば、お客さんからは「なんでインキ屋さんが」と指摘された。大阪で製版、写真を、金沢でインキを、東京で開発を担当した。多くの業界にいたこと、多くの土地にいたことが知恵を与えてくれた。常に自分にできることは何か、自分の役割は何かを考え続けた。今でも 40 数年前のお客様に声をかけていただく。一期一会、多くの方々に支えていただいた。現在は安中市唯一の古書肆、日本唯一の古地図と城の専門古美術商であり、博物館である。紙と印刷の文化で地域活性化が実現できればと願っている。

遙か中学時代から織田信長にあこがれ、その革新性を敬愛した。「人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻のごとくなり、一度生を得て滅せぬ者のあるべきか」と謡曲敦盛を歌い続けた。信長の死生観と受け取った。いずれ死ぬ、いつ死んでもいいように、後悔をしないように大義に生きようと。彼の 49 歳の人生にあこがれた。大義のために死するも人生、されど、生きて再起するも人生である。人間は戦国時代も現代も岐路に立たされる。決断と実行の繰り返し。悩んだときは「我に過ぎたる望み有、我歌声の高ければ」という言葉を叫び続けた。この言葉は人生に勇気付けてくれた。常に高い目標を掲げ、挑戦し続ける原動力となった。

群馬と長野の県境、碓氷峠は中山道の難所である。上野

国最後の宿坂本宿から碓氷峠まで、比高 800m くらいである。長野や東京等への移動には上信越自動車道を利用する。この高速道路はトンネル内で高低差とカーブがあり、妙義の奇景を楽しみなが

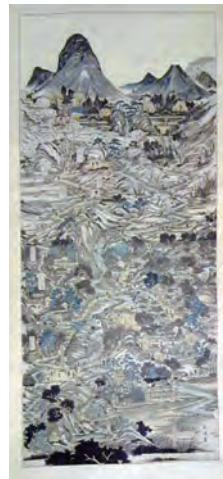
ら走れるが、近距離の松井田から軽井沢までの移動としては、軽井沢インターが高低差を避けるために非常に南に寄っており、軽井沢探訪としては遠回りになる。大半の路線トラックは碓氷バイパスを通る。カーブが 50 力所近く、日光いろは坂

のような道で、やはり、カーブと高低差がある。殆ど利用されないのが旧 18 号線である。この道は碓氷峠鉄道施設眼鏡橋までは観光客でにぎわうが、それから峠までは約 190 力所のカーブがあり、非常になだらかで、殆ど車が通らない森林浴の道である。この 3 本の道を選択する。企業人であった時代はすべて高速道路であった。余裕のある時は旧 18 号、通常は碓氷バイパスである。もっとも 3 本の選択は自動車道で、江戸時代の中仙道は坂本宿から山へ入り、幅 1m ほどの山道である。本当に参勤交代の行列が通ったのかと思われるほど狭い。鉄道では旧信越本線が横川で廃線となり、長野新幹線のみである。安中榛名駅から軽井沢駅までわずか 10 分、駅の間はすべてトンネルで、乗り越した時に携帯も使えない。碓氷峠道だけでも種々相、人生、どの道を選ばれますか。

古来、多くの人生道中記が描く、人の道も試練と選択の連続である。活字文明の衰退は古書業界も、印刷業界も揺るがしている。大きな変貌を余儀なくされる。坐して死を待つより、生き残りに挑戦し、新事業を開拓し、次世代に継承しましょう。



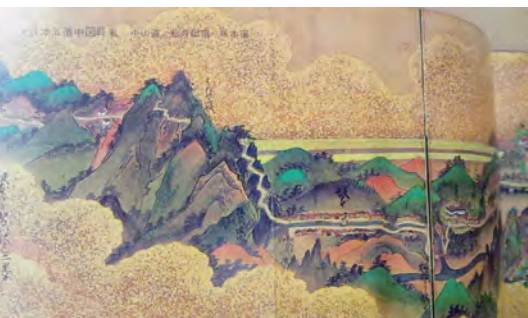
道中図に見る上野国と信濃国



人生道中図掛軸



人生道中図の部分



群馬県史掲載道中図屏風に見る
坂本宿・碓氷峠

CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH CONVERTECH